

「動中の工夫」

1. 「巧遅拙速」

私は、昨年夏に「つきの神様を味方にする『ちょっとの差』」という本を一気に書いたのですが、最近、その講演をする機会に恵まれるようになって来ました。本を書く時は、それなりに熟慮して101篇の「人生訓」を書き上げた心算でしたが、講演をして見ると過不足の部分を見出すようになったのです。確かに、孫子の兵法でも「巧遅拙速」(上手で遅いよりも、下手でも速い方がよい)と言っているのですが、その後のブラッシュ・アップが欠けると、少し、欠点が残るのです。

右掲は、禅の言葉ですが、「静中」とは座禅を組んで思案する事で、「動中」は作務(仕事)という意味であります。座禅を組んで熟慮するのも重要だが、とりあえず出来ることから着手して、現実の問題を解決する工夫を凝らして磨きあげる方が思案と比較にならない位勝っていると言う意味です。まさに、その通りの経験をしているのです。昨年夏の著作は、それなりに評価されているのだが、著者として講演の中で新しい問題などを発見しているのです。これから、中味を再吟味して、もう一度、書き直したいと思っています。

動中の工夫、

静中にまよること

幾百千億万倍

2. 「一気呵成」

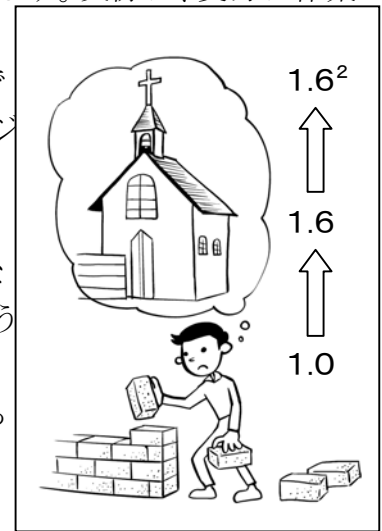
私は、一気に書き上げる集中力に恵まれているタイプなので、何事も「集中」して仕上げる事が多いのです。確かに、お客様に「早いのが取り得」と評価される位なのです。評価点は、80点位なのかも知れないのですが、そのままだでも支障がない位の仕上がり具合なのです。しかし、少し手を加えると残り20点分を少しづつカバーする事ができるのです。時間的余裕がある場合は、キャッチ・ボールしながら仕上げて行くのですが、大概の場合は、時間が残されていないので、そのまま採用されるのです。いわゆる「一気呵成」のタイプなのです。

私は、「集中」した後は、なかなか、レベルアップの為の20点分に気づけないのです。ジワジワ行くタイプではなく、パッと行くのです。思いついたイメージを描きながら、書きながら修正を加えているのです。こんな具合ですから、出来たと思った時はアイデアが出尽くした状態なので、どちらかと言うと書き上げた快感にしたっている状態なのです。確かに、お客様から「こうしたら・・・」というご指摘を得て修正する場合もあるのですが、多くの場合、全体の構図が崩れて質を下げるケースもあるのです。

パッと閃いたイメージを信じて、それに向かうという事は制作する人に重要な要素と思っています。イメージが出来ずに制作しても、女性のお化粧と同じで、ただ時間だけを浪費するだけなのです。もちろん、書き始めて最初のイメージから修正する場合もあるのですが、「閃き」というイメージは非常に重要な能力なのです。これには、いろんな知識・経験の積み重ねも大きな要素です。プロと呼ばれる方は、過去の経験の中から瞬時にイメージの候補を幾通りも描けるのですが、私は、まだ、その域には到達していないので、トップ・アマのレベルなのです。アマ的なので、プロのようにオールラウンドで優れている訳ではなく、ある一点のことでは、グッと大きなパワーを発揮するタイプなのです。

3. 「レンガ積みの方則」

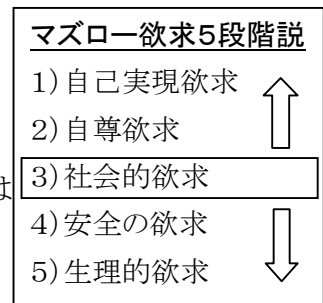
私は、お客様に「やる気のパロメーターは改善提案数だ」と話しています。実際に、受身に作業していると時間ばかりが気にかかるのですが、少し、仕事に身が入ると「創意工夫」が始まるのです。右掲は、「レンガ積みの方則」のイラストですが、単に作業している状態の能率を1とすると何が出来るのかイメージして作業すれば能率が1.6倍に跳ね上がると言われてしています。これは、朝の通勤で、家から駅に向かって歩くスピードと、その時に、忘れ物に気づいて取りに帰るスピードの差でもあるのです。そして、さらに重要な事は、自分で工夫が入りだすと $1.6^2 = 2.56$ (約3) 倍に跳ね上がるという方則なのです。



「目標」をハッキリと意識させる事で1.6倍に跳ね上がるのですが、さらに、自分で目標達成への工夫をし始めると $1.6^2 = 2.56$ 倍、すなわち、約3倍になるのです。コンピュータの世界では、プログラマーの評価は月額60万円が限度のようですが、上級のSEと呼ばれる人は月額180万円の評価を受ける人もいます。

4. 「声かけで、人づくり」

前項で「レンガ積みの方則」で、人は「やる気」の持ち方で約3倍の差がつく事をご紹介しましたが、この「やる気」の引起し方が重要なのです。「改善は、人づくり、物づくり」と言われるように、各自の創意工夫が重要なのです。右掲は、有名なマズローの欲求5段階説ですが、誰でも最初は仲間になって認められたいという**3) 社会的欲求**からスタートするものですが、年月が過ぎると「上昇」している人は少なく、「下降」している人が多いと言うのが一般的な実情です。これでは「創意工夫」の表れである「改善提案」が出て来ないのも頷けるのです。



私は、マグレガーのXY理論ではないが、丁度、イソップの「北風と太陽」という「つかみ」でPDCAのC:Checkのやり方をお話する事があります。分り易く子供の勉強に喩えると「北風(X理論):勉強しなさい」と言うよりも「太陽(Y理論):今日、何を習ったの?」と問いかける方が、子供がイキイキと話すようになり、より学校で勉強に身が入ると言われるように、仕事の場合でも「今日は、どうだった?」と聞くように指導しています。「聞かれる」という事で「放置されていない」と言う安心感(ラポール)が生まれるのです。

ところが、特に非製造業では、日報で済ます事が多く、頭で報告して、管理者も頭で指示しているというケースが多いのです。しかも、紙やパソコンで会話してしまい、日常は放り出しておきながら、結果の数値だけを責めるという構図になっているケースが多いのです。こんな状態を回避するには、毎日のPDCAサイクルで「今日は、どうだった?」という問いかけから「じゃあ、こうしよう」というA:対策までを本音で会話しあうことをお勧めしています。漢字では、「忙しい」は「忙」=「心」+「亡」と分解されて、「心を亡くす」という事なのです。忙しい時こそ、ちょっと声かけしてアドバイスする「心」が管理者には必要です。

「レンガ積みの方則」で示すように、人は「やる気」が本物になれば、「創意工夫」が始まって、必ず、「提案」が出て来るようになるのです。この「提案」を受容して「ありがとう」という労いの言葉をか

けて、その「提案」の実行を促がす事が重要です。「こうしたい」という貴重な気持ちを大切に、それを現場で実行させる事で「やり抜く自信」というものが生まれます。この「自信」が人を大きく育てて行くのです。「こうしたい」と思って、実際にやってみて「壁」を克服した「喜び」はかけがえのないものであります。その小さな第一歩が「今日は、どうだった？」という「声かけ」なのです。

最初に、「動中の工夫」と「一気呵成」をご紹介しますが、「やりながらの工夫」というのは、実際の問題を解決するのですから、非常に重要なことなのです。「やりながら」という事は、目標を小さい所において「一気呵成」にクリアする方がベターなのです。即効果だと「次も・・・」という欲求が動き始めるのです。指導者は「小さな目標」を与えるようにして、即効果で自信をつかせて「次も・・・」という風にスパイラル状にPDCAサイクルを回してレベルアップさせるのが良いのです。単純な「小さな目標」と「声かけ」で「やる気」を大きく育てるのです。

【まとめ】

1. 机上の空論よりも現場で展開する「やりながら」の創意工夫が重要
2. やる事をハッキリさせて一気呵成で即効果主義がベター
3. 「やる気」で約3倍の差が生まれる
4. 「太陽(Y理論): 今日、どうだった？」の声かけでPDCAサイクルを回す

【AMIニュースのバックログは <http://www.web-ami.com/siryo.html> でご覧になれます！】